

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)／小野
由美子

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

①専門分野に関する最新の研究動向、研究成果、理論について学ぶ機会を提供する。
②自らの実践を省察する習慣を形成し、自らの実践を評価する多様な視点を獲得するのを促す。思考、省察を促すためのツール、方法(ラベルワーク、マイクロエスノグラフィー他)の導入。受講生の間でのリフレクションの共有。教員養成課程に在籍する諸外国の学生との交流など。
③エビデンスに基づいた自己評価の使用。成績評価はこれまでもエビデンスに基づいた自己評価と教員による評価とを総合して実施しているが、今年度は学生独自の評価視点を1つ加えて学習に責任を持たせることを試みる。

2. 点検・評価

授業内容・方法

①②担当する授業科目では現職教員の受講は1名のみである。授業では諸外国での言語教育の実践や、教員の所属学会での最新の研究動向に触れる機会を多く設け、教員自身が自らの価値観や信念を振り返る機会を創出するようにした。また、将来、教員が自らの実践を研究会・学会で報告することも視野に入れて、実践を分析するための枠組みとしての理論の重要性を強調するとともに、変容的学習理論、異文化感受性発達理論を紹介した。また、そうした理論的枠組に基づいた、教員の研究論文を紹介した。教員が自らのもつ世界観、価値観を豊かなものにするよう、海外からの研修生、研究者との交流の機会を数多く提供した。省察のツール、方法についても学外から特別講師を招き、実践的に紹介した。③成績評価については、受講生が自らの学習に責任を持つように事前に評価視点を共有した。また学生自身にも評価の視点を提供させ、自己評価させた

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ①学部・大学院に在籍する日本人学生に対して、多様な異文化体験を企画・実施し、多様化する公立学校の学習者に柔軟に対応できるスキル開発を支援する。
- ②院生会、茶道同好会を通して、留学生と日本人学生、外国人研修生と日本人学生との交流を企画・実施する。その際、学生自身が実施プロセスに主体的に関わるように工夫する。
- ③学生・院生が国内外の学会で研究発表できるよう指導支援する。

2. 点検・評価

- ①県教育委員会と協力して、本学学生を徳島県内の義務教育諸学校に在籍する日本語指導が必要な子どもたちの日本語支援ボランティアとして派遣した。県教育委員会主催の10年次研修「異文化理解講座」を企画し、タイの留学生を講師に迎えるとともに、本学学生にも参加を呼び掛け、多くの参加を得た。その際、異文化理解のための種々のツールを紹介し、実践的との評価を得た。「アフリカを知ろう、ケニアを知ろう」という企画では、本学学生を補助者として雇用し、ケニア人研修員と地域の児童生徒との交流を支援する機会を提供した。また、大学祭においては、民族衣装ファッションショーを企画し、日本人学生と留学生、研修員との交流を深めた。また、本学教職大学院の学生とケニア研修員の意見交換の機会も設け、教員の国際理解、異文化交流を支援した。
- ②院生会主催による国際教育フォーラム(2013年11月)の実施、JICAによる本邦研修の機会を利用した茶道部「一期一会」による茶会、所属ゼミ生主催による歓迎会など、学生自身が交流を企画し、実施することを支援した。
- ③所属ゼミ生が中国四国教育学会、日本語教育研究集会で発表するのを支援した。
- ④所属ゼミ生が、日米教員養成協議会において口頭発表、ポスター発表をするのを支援した。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

- ①科研(基盤研究(B)、挑戦的萌芽研究)の成果をまとめて学会で発表です。
- ②科研「途上国における授業文化に関する研究」の成果をまとめる。
- ③受託研修での研修生の学び、研修の効果について分析する。

2. 点検・評価

- ①異文化間教育学会(6月)、International Council on Education for Teaching (ICET: 6月)、比較教育学会(7月)、Southern African Association for Mathematics, Science and Technology Education (SAARMSTE: 1月)において、科研の成果を発表した。
- ② SAARMSTE機関誌、広島大学教育開発国際協力研究センター紀要(CICE紀要)、本学学校教育研究紀要、本学国際教育教育協力研究誌に科研成果を投稿した。
- ③JICA受託研修での研修生の学び、とくに授業観察力、授業省察力についての分析を継続して行っている。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①国際交流委員として、本学の国際化に貢献する。
- ②留学生コーディネーターとして、留学生の教育・学生生活の改善に貢献する。

2. 点検・評価

- ①国際交流委員をつとめた。
- ②留学生コーディネーターとして留学生オリエンテーション、留学生と学長との懇談会を支援した。
- ③学内の評価基準・評価方法開発協議会メンバーとして協議に参加するとともに、特にアメリカの教員養成学部生のパフォーマンス評価の動向について報告した。
- ④図書館運営委員をつとめた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①アフガニスタン識字教育強化プロジェクトに専門家として参画し、現地での業務ならびに本邦での受け入れ研修を行う。
- ②ケニア研修員を受け入れ、指導技術改善の研修を行う。
- ③県・大学連携事業(異文化理解)に協力する。
- ④ルワンダでのJICAプロジェクトに短期専門家として参加する。

2. 点検・評価

- ①アフガニスタン識字教育強化プロジェクト専門家として、第3回研修に参加し、現地スタッフの能力強化を行うとともに、メールベースで業務の実施に協力した。
- ②JICA受託研修としてケニア研修員21名を受け入れ、授業研究の研修を行った。また研修期間中、本学の大学祭民族衣装ファッションショーへの参加、教職大学院との意見交換会、県内の児童生徒との交流など、異文化交流を支援した。児童との交流に参加した保護者からは次年度もぜひ実施してほしいとの要望が寄せられた。
- ③県大学連携事業の一環として、現職教員ならびに本学学生を対象に異文化理解講座を実施し、実践的で有益と高い評価を得た。
- ④ルワンダのJICAプロジェクトに短期専門家として参加し、PDCAサイクルに基づく年度計画立案等の支援を行い、現地スタッフの能力強化を行った。また、次年度、事務職員を短期専門家として現地に派遣できるよう協議した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)